

Thank you, Boy

千葉県 第二中学校 3年 石橋 歩

ある日、朝練がなくてゆっくり歩いていた僕の少し前で、音を立ててなにかが転がった。鍵だ。ついさっきすれ違った自転車の人のものだと悟った僕は、鍵を拾い上げて叫んだ。

「鍵、落としましたよ！」

でも、その人はこちらをふり返りもせずに行ってしまう。

ならばと思い、僕は全力で走り始めた。足の速さには自信があった。でもさすがに下り坂で自転車に追いつけなかった。

どんどん僕から離れていってしまう自転車を、細目で見ながら走る僕は、100メートルほど進んだところで、

(もう諦めよう、追いつけねーよ。)

そう思って少しスピードをゆるめた。

そのとき、目線の先で、自転車が止まった。信号のある横断歩道を渡るようなそぶりをしていた。

(まだ間に合う！)

そう思ったとたん、僕は再び全力で走り出した。自転車が止まった信号は、歩行者用のボタンがあって、しかも押してからがとても長い信号だった。家の近所だからそのことはよく知っていた。全力で走っている僕を、逆から歩いてくる同じマンションの人が不思議そうに見ていたけど、気にせず走った。

あと少し、20メートル、10メートル、追いついた。僕は、自転車に乗って信号を待つ女性に話しかけた。

「すみません、鍵、落としましたよ。」

すると、女性が振り返って、少しカタコトの日本語でこう答えた。

「スママセン、アリガトウゴザイマス。」

どうやら少ししか日本語が話せないようだった。外国の方だった。

一瞬きれいな顔立ちにびっくりしてから、僕は鍵を手渡した。英語が苦手だったからあまり会話はできなかったが、鍵を届けられてよかったと思った。そして女性は、最後に、

“Thank you, Boy.”

と言って、自転車をこいでいった。

学校から逆方向へ走っていたから、いつもの2倍近く、その日の登校は時間がかかった。でも悪い気はしなかった。むしろ気持ちよかったと言える。親切っていいなと思いつつ、僕は学校へ向かった。

外国人にお礼を言われるのが初めてだったから、少し聞き取れないところもあったけど、相手の嬉しそうな顔から気持ちは伝わってきた。たとえ言葉でのお礼がなくても、言葉が違って、気持ちを伝えられれば親切になるし、お礼にもなる。

そんなことを考えた僕は、少し笑う、一人で歩きながら。耳に残った感謝の言葉が頭の中でこだまする。

“Thank you, Boy.”